

自分らしい豊かな文章表現を高める授業の在り方
～第5学年国語科「わたし風『枕草子』」の実践を通して～

小千谷市立小千谷小学校 教諭 三本 瞳

I 研究のねらい

本学級の子どもの多くは、書く量が少なく、事実と思いを結び付けて書くことができていないという課題がある。提案文を書く学習では、提案したい内容をもつことはできるが、その提案を裏付ける理由や根拠を書くことに弱さが見られた。相手に伝えたいことをより効果的に伝えるためには、事実や思いだけではなく、文章表現を豊かにしたり、事実と思いをつなげて表したりすることが有効である。そこで、自分らしい豊かな文章表現をしたり、思いを結び付けて書いたりするために、枕草子を味わうことで五感を働かせた言葉や文を取り入れ、より豊かに表現できるようにしたいと考え、単元を構成した。

II 研究の内容

「枕草子」のそれぞれの段落は、季節、時間、好きな様子や思うことの順序で書かれており、特有のリズムを感じる。また、情景を想起させるために五感に訴える言葉を使用している。このような構成や情景描写の仕方を子どもの文章表現に活用させるために、次の二つの手立てが有効であったかを検証する。

手立て1 五感を入れた豊かな表現の提示

本単元では、「枕草子」の書き方に注目して読み取らせる。中でも五感に注目させることで、様子や気持ちがより生き生きと伝わることに気付かせる。

「枕草子」の読み取りでは、視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚の五感で感じたことを表している部分に印を付け、その表現のよさを味わせる。次に、わたし風「枕草子」を書く活動で、仲間が書いた五感を入れた豊かな表現を提示し、自分の表現に活かすことができるようにする。

そうすることで、書くことが苦手な子どもも五感という視点からイメージをふくらませ、自分のカードに言葉を書き加えることができるようになることを期待する。

手立て2 表現を豊かにするための仲間との交流

本単元では、「枕草子」の書き方の特徴や自分が書いた文について、感じたことを仲間に伝えたり、アドバイスしたりする場を設定する。仲間と読み合うことを推奨することで、仲間の表現に触れ、よりよい表現に気付き、より表したい瞬間が思い浮かぶような表現にしようという意欲を高める姿を期待する。

III 研究の概要【対象 小千谷小学校5年生1学級(男子19人、女子16人)平成28年9月実施】

1 単元名 第5学年国語科「わたし風『枕草子』」(学校図書)

2 単元の目標

「枕草子」の書き方のよさを読み取ったり、自分の好きな季節を想起しながらその情景をカードに書いたりする活動を通して、五感や気持ちを入れて書くと表現が豊かになることを理解し、カードに書いた言葉や文をもとにわたし風「枕草子」を書くことができる。

3 単元の指導計画(全6時間)

1次 「枕草子」を読み味わおう(2時間)

2次 わたし風「枕草子」を書こう(4時間)

4 単元の実際

(1)「五感」や「気持ち」の表現を増やすための仲間の例文の提示

3時間目に児童は季節を1つ選び、「いいな」と思う瞬間を文に書いた。4時間目の授業では、追求問題を「自分の表したい瞬間が伝わるように五感や気持ちを増やそう」と設定した。前時に子どもが書いた文から、五感と気持ちの両方の表現が入っている文を本時で提示し、五感と気持ち

ちを見付ける活動を行った。この段階で、五感と気持ちの両方を書いていたのは、35人中16人であった。以下は、追求問題を作るまでの導入での話合いである。

発話者	発話内容
T 1	前の時間に書いた文を紹介してもらおうよ。何が五感か考えながら聞いて。
A 児	紅葉した山に夕日がさすとき。
C	目だ。
B 児	音もなく静かにくる風が体にあたり涼しくなる。
C	耳。
T 2	Bさんは音がないということを感じているんだね。みんなのカードには、これ以外にも五感が書いてあったよ。読んでもらうよ。
C 児	黒っぽい桜色がきれいなきが最高。
D 児	サンタからのプレゼントを見るのも、また、楽しみ。
E 児	桜の花びらと朝焼けが混ざるのは最高。
T 3	何か気付いた？
C	楽しみは、気持ち。最高も思ったことだから気持ちだ。どれも気持ちが入っている。 桜の花びらと朝焼けが混ざるのは最高。(Eさん) (黒板に掲示)
T 4	五感や気持ちは何？
C	気持ちは、最高。五感は、目。桜と朝焼けを見ている。
T 5	気持ちがあるのと、ないのとではどっちがいい？
C	ある方がいい。混ざるで終わると、変な感じ。こんなふうを感じたんだって分かる。そのときのEさんの気持ちが分かるから、いいと思う。
T 6	気持ちがあると、Eさん風の文章になるんだね。みんなの文章にも五感や気持ちが増えるといいね。

子どもたちは話合いを通して、五感と気持ちの両方が入っていると、自分の表したい瞬間をより伝えられると考えていた。そして、自分の記述を読み直し、五感に青線、気持ちに赤線を引いて確かめることで、より詳しく書こうという意欲を高める姿が見られた。また、書くことに意欲的でなかったE児は「自分の文がパワーアップしている」と発言し、自信をもつことができた。

(2) より表したい瞬間が思い浮かぶような表現にするための仲間との交流

自分の文を読み直して、五感と気持ちを働かせた言葉を書き足した。書くことに苦手意識がある子どもが少なくないため、活動の前に班の仲間と相談したり、よさを伝え合ったりしてよいことを確認した。F児「ポカポカするって五感？」G児「そうじゃない？きれいって気持ち？」「うん。」と聞き合い、線を引いていた。そして、F児は「タンポポが一つ二つ咲いているのが、またきれい」などと付け足していた。気持ちを書き足すときに、初めのうちは提示した言葉から「最高」と表現する子どもが多かった。しかし、「風が来たときの寒さの恐怖」など、次第に異なる気持ちも書くようになっていった。また、班の仲間の文についての話合いをよく聞いて、自分の文にも生かせるかと考えながら見直す子どももいた。

IV 成果と課題

- 五感と気持ちが入っているモデル文を提示することで、子どもたちは、どちらも書いてあると自分の表したい瞬間をより伝えられると考え、自分の文章がより伝わるようにと読み直したり、書き足したりしていた。五感と気持ちを書いている子どもは16人だったのが、4時間目終了時には、32人に増えた。
- 仲間とのかかわりから、自分の表現を見直したり、次の表現を生み出していく際の手がかりにしたりすることができた。特に、書くことに抵抗感がある子どもは、聞くことができる安心感や認めてもらうことで自信をもちながら、活動することができた。
- △ 深まりをねらう交流か広がりやねらう交流かが明確でなかったために、交流の目的が曖昧になり、自分の表現を豊かにするのではなく、ただ言葉を増やすだけの交流になった子どももいた。学びの質を高めるために、目的意識をはっきりさせた交流のさせ方について追求していきたい。